修報〈論語素読会会報〉

巻　頭　言

# 二十一世紀（ミレニアム）を展望して

学校法人昌平黌　理事長
儒学文化研究所　所　長
**田　久　孝　翁**

儒学文化に関する国際会議を開催して儒学の近代化を促進する意味が確認された思いがする。ということは東アジアを中心にアメリカ、フランス、ドイツの協力を得て儒学とは何か、文明とは何かについて参加八ケ国二十五大学一〇五名に及ぶ研究家の賛同を得たということであります。その意味に於いて世界は今、東西関係冷戦の時代を越えて等しく再生の秋を迎えているということであります。

特に東アジア全域に於いても戦後五十五年、改革開放相次ぐ波動改革の中でいよいよ平和の局面を迎えることになる。一九九〇年は東西ベルリンの壁が崩壊され、今また南北朝鮮三十八度線が取り除かれようとしております。当然のことながら、そこには南北朝鮮民族主義が大きな力となってその息を吹き返し世界の平和に一石を投じようとしております。これ等東西に及んだ二つの問題は自から好んで起きた問題ではあり得ない。ドイツにしても朝鮮半島にしても、全ては一九四〇年に起きた世界大戦の所産として参戦国間の冷戦が問題であって、その力関係の犠牲となったのでありますが、既に東西ベルリンの壁は前述の通り十年前に解消されましたが、南北朝鮮の問題は漸く序に着いた処でありますので、これが解消されるまでは枕を高くして休まれないのは当然であります。何故ならば、曾て朝鮮全域を統治した日本の責任は終わっていないのであります。

南北朝鮮が百年前の姿に返り、李王朝時代の姿に戻った時に初めて日本の責任は開放されるのだと思われるからであります。中国、台湾の関係も然りであります。和魂洋才などと言っている場合ではありません。然して東アジアの各民族を始め、世界は全て再生の時代を迎えていると言って過言ではありません。当然のことながら、そこに君臨するのが儒学孔子の教えであると言うことであります。

中国で言うならば、紀元前一七〇年、漢の武帝によって国学と定められ、科挙制度の基本となって二〇〇〇余年、朝鮮半島にあっては一四五〇年代の李王朝以来儒学を国学とした。さらに一六〇〇年代の日本は徳川家康公によって儒学（朱子学）を国学として定められた経緯があります。

基をただせば、東アジア（東洋）の文化の発信地は中国、孔子の教えに遡るのであります。孔子は中国春秋戦国時代麻の如くに乱れた天下にあって諸子百家争鳴と謳われる中に独り儒学を打ち立てるその精神は今日に及んでいるのであります。その精神は神の国たる

神の以前の哲学であったと言って良い。

斯くして戦後五十五年、我々日本人は建国時の精神に立ち返り、己の欲せざるものを他に与えず。自らの責任を回避することなく、歴史に忠実な国民として世界の平和に寄与することが二十一世紀に求められる日本人の「心」であります。

日本で初めて行われた今回の儒学文化に関する国際会議の持つ意義の全ては、本講記述の通りであります。

従って学生諸君のレポートも現代人の感覚の中に各々の心に響くものがあったことを評価致したいと思います。